

守り、つなく、 江戸園芸

2022年3月6日(日) 13:00~16:00

会場 神代植物公園(オンライン)
主催 公益社団法人日本植物園協会
共催 公益財団法人 東京都公園協会

第1部 江戸の園芸植物を守る

「日本植物園協会ナショナルコレクション認定制度と現在までの認定コレクション」
ナショナルコレクション委員会 倉重祐二

「江戸の花サクラソウ ~品種と栽培文化の継承に向けて~」
さくらそう会世話人代表・日本植物園協会名誉会員 鳥居恒夫

「江戸の園芸と令和のガーデニング 古くて新しい植物 松葉蘭」
日本松葉蘭連合会・静岡伝統園芸保存会 落合啓二

パネルディスカッション
「ナショナルコレクション制度を活用した江戸の園芸植物の保存」
松井映樹(神代植物公園園長)・鳥居恒夫・落合啓二・倉重祐二

第2部 江戸の園芸文化を知る 事例紹介

「神代植物園のウメコレクションとうめ園」神代植物公園園芸係長 石川等

サクラソウ唐衣さくらそう とうい



ウメ月宮殿うめ げつみやう



マツバラ 楊枝文龍山まつばら ようしぶんりゅうざん



サクラソウ 酒宴の床さくらそう しゆゑんのとこ



マツバラ 青龍角鉢/尾張藩御庭焼まつばら せいりゅうかくひつ/おわりはんごうていやく



ウメ未開紅うめ みかいらう



マツバラ 古金蘭 鉢/阿波八須賀家蔵オランダまつばら ことんらん ひつ/あははすけけさうおランダ



マツバラ 鳳凰柳まつばら ほうおうりゅう



日本植物園協会ナショナルコレクション認定制度と 認定コレクション ～「植物遺産」を守り、伝える～

ナショナルコレクション委員会 倉重祐二

日本には約6,700種以上の野生の植物が自生し、そのうちの1/4にあたる1,779種が絶滅の危機に瀕しています(環境省第4次レッドリスト)。この危機的な状況を改善すべく、日本植物園協会では2006年から植物多様性保全ネットワーク事業をスタートし、自生地での種子の採集や種子の長期保存をはじめとする保全活動を実施してきました。その結果、現在は65%以上の絶滅危惧種を保有するに至っています。

一方、日本で栽培される栽培品種の中には、シンポジウムで取り上げたサクラソウやマツバランなど、日本原産植物や古くに渡来した植物を改良した、日本独自の文化の象徴ともいえる種類が多数含まれます。その代名詞とも言える伝統園芸植物は、その価値が理解されにくく、栽培や繁殖が難しいこともあって、多くの貴重な種類が失われてしまったのが現状です。このような、言わば「植物遺産」は、愛好団体や個人等の多様な主体によって保有されているため、重要なコレクションの洗い出しや保存の状況は把握されていません。また、多くの栽培品種は栄養系(クローン)であるため、種子ではなく植物体を保存するシステムが必要となります。

このような「植物遺産」を守っていくことに一歩を踏み出そうと、「野生種、栽培種に関わらず、日本で栽培されている文化財、遺伝資源として貴重な植物を守り後世に伝えていく」ことを目的として2017年7月にスタートしたのが、日本植物園協会のナショナルコレクション認定制度です。

植物コレクションは分類群や歴史等のテーマを持って行われていることが普通です。保有者から申請されたこれらのコレクションを審査し、「日本植物園協会ナショナルコレクション」として認定することで、以下のような好

循環が期待されます。

- ・広く社会にその植物の価値が知られる
- ・知られることでさらに内容が充実する
- ・保全に対する責任度が増す
- ・今まで以上に多くの人の目に触れる
- ・さらに価値や認知度が高まる

さらに、コレクションの情報の公開、認定後の危険分散や将来の橋渡し事業、シンポジウムの開催、認定者の交流や情報交換などを行うことで、継続性のある保全体制を目指しています。

日本には、植物趣味家人口の減少など、さまざまな理由で、存在を知られることもなく、失われてしまった貴重な植物が多数存在すると思われます。本制度によって、貴重な「植物遺産」が未長く保全されることを願っています。

認定コレクション

第1号

「武田薬品京都薬用植物園命名ツバキ品種群」

武田薬品工業株式会社 京都薬用植物園(京都府)

江戸時代のツバキの園芸化は、ヤブツバキとユキツバキの両種が自生し、幅広い変異が見られる北陸産によるところが大きい。これらは高度成長期に消滅の危機に瀕していたが、申請者によって1956年より調査、収集が行われ、155品種が新品種として命名された。コレクションは、命名された新品種のうち現存する121品種の基準木である。

(2018年6月19日認定)

第2号

「神代植物公園サクラソウ品種コレクション」

公益財団法人 東京都公園協会

神代植物公園サービスセンター(東京都)

江戸の地に生えた野草から江戸の人たちが育てあげた唯一の園芸草花であるサクラソウの現存する品種のほぼ完全なコレクション。「さくらそう会」が認定している約300品種のうち、293品種を保全し、普及活動や展示によって伝統園芸文化継承にも注力している。

(2018年6月19日認定)



第1号 武田薬品京都薬用植物園命名ツバキ品種群

第3号

おぐらいけ
「巨椋池由来のハス」

宇治市植物公園(京都府)

京都府の巨椋池には、古くからハスが生育し、名所として知られてきたが、1933年から1941年の干拓によって農地となった。その後、1960年代からこの地に残されたハスが採集され、多様な花の形態を持つ100品種以上が栽培されてきた。これらのうち、巨椋池土地改良区や京都花蓮研究会の協力で収集された54品種のハスのコレクションである。

(2018年12月10日認定)



第2号 神代植物公園サクラソウ品種コレクション

第4号

「兵庫県立フラワーセンター

ストレプトカーパス属コレクション」

兵庫県立フラワーセンター(兵庫県)

イワタバコ科ストレプトカーパス属(旧セントポーリア属含む)の原種、栽培品種188種類のコレクション。そのうち57種類が兵庫県立フラワーセンターの育成品種。原種が持つ形質や性質の多様性、それらと栽培品種との遺伝的な関係性などを理解する上での基準となるだけでなく、貴重な遺伝資源として品種の開発につながる。

(2020年2月4日認定)



第3号 ハス'五丁田下の段'



第4号 ストレプトカーパス・ミシェルモレイ (*Streptocarpus michelmorei*)

第5号

「兵庫県立フラワーセンター

ウツボカズラ属の原種の系統保存コレクション」

兵庫県立フラワーセンター(兵庫県)

ウツボカズラ属の野生種は開発や環境悪化などにより減少の一途をたどっており、輸出入に関してもワシントン条約により厳しく規制されている。兵庫県立フラワーセンターでは、来歴が明らかな野生個体を1988年より収集し、国内屈指の134系統におよぶ原種、また72種類の人工交配種からなる国内屈指のコレクションを構築し、保存と栽培・展示を30年以上続けている。(2020年3月25日認定)

第5号 ネペンテス・アンプラリーア (*Nepenthes ampullaria*)

第6号

「江戸時代の奇品植物」 浜崎 大(埼玉県)

奇品園芸は、奇品家と呼ばれる好事家の目を通して選ばれた、葉の変異に美と希少性を見出す独自の園芸文化で、江戸中期から幕末のころまでつづいたが、これまで体系的なコレクションが行われることがほとんどなかった。本コレクションは、文献を駆使して品種名を同定した39品種で、江戸時代の奇品植物の生きたりファレンスとなりうるものである。

(2020年3月25日認定)



第6号 コウヤマギ'浅伊出黄布'

第7号

「変わり葉ゼラニウム品種群」

広島市植物公園(広島県)

変わり葉ゼラニウムは、ペラルゴニウム属のゾナレ・グループの中で、葉の斑模様や形、質感などが特異的に変化した葉芸をもつ品種群である。明治末期から大正時代に欧米から輸入され伝統園芸植物のように扱われて流行し、大正3~5年と昭和2~4年には大ブームを巻き起こしたが、戦後衰退し、現在はほとんど栽培されていない。広島市植物公園で保有する43品種は、大正時代から生産、販売していた専門業者や趣味家から収集したもので、現存する品種のほとんどを網羅する日本最大のコレクションである。

(2020年12月15日認定)



第7号 広島市植物公園での展示

第8号

「能登地域に残る江戸キリシマ系ツツジ古木群」

特定非営利活動法人 のとキリシマツツジの郷

(石川県)

1600年代後半に流行したツツジの代表である江戸キリシマ系ツツジは、深紅の花が多数咲く、当時最も評価の高いツツジであったが、現在まで残る古木と古品種は共に少ない。本コレクションは、のとキリシマツツジの郷等の調査によって明らかになった石川県能登地域に残る推定樹齢100年以上の江戸キリシマ系ツツジ7品種および「けら性」3系統などからなる550個体である。一地域としては日本最大の江戸キリシマ系ツツジの個体、品種数であり、のとキリシマツツジの郷により、保全や普及、調査活動が活発に行われている。

(2021年4月21日認定)



第8号 珠洲市池上家の‘本霧島’(石川県天然記念物)

第9号

「中部のツバキ品種コレクション」

公益財団法人 名古屋市みどりの協会

鶴舞公園事務所

「中部のツバキ」は、尾張を中心とした中部地方において、江戸時代から続く茶道・華道の繁栄から収集、作出されたツバキの総称で、独自の伝統と風土に合致した郷土のツバキとして成立した。京ツバキと江戸ツバキ、肥後ツバキ、伊勢ツバキ、ユキツバキなどの要素を含む日本のツバキの集大成と言え、早咲き品種の積極的な作出によって、花の少ない晩秋から初冬にかけて開花し、長期間観賞できることが特徴である。

本コレクションは、これまで記録された中部のツバキ70品種のうち52品種であり、胸高直径が100mmを越す古木約100株が含まれる。約40年間継続して管理され、公開されている貴重なコレクションである。

(2021年5月7日認定)



第9号 ツバキ‘葛城紋’



National
Collection
JABG National Plant Collection
Certification System

植物園協会ナショナルコレクション
<http://www.syokubutsuen-kyokai.jp/nc/>



江戸の花サクラソウ

～品種と栽培文化の継承に向けて～

さくらそう会世話人代表・日本植物園協会名誉会員 鳥居恒夫

はじめに

野生植物の保全活動に促されて、主に園芸植物を中心とする栽培植物についても人類の文化として保全しようという機運が高まり、植物園協会としてナショナルコレクション認定制度が発足したことは画期的なことで、関係する方々の尽力に感謝したいと思います。

実を云えば、私は千葉大学の学生であった19歳の頃から、農場にあったウメ、ツバキ、サクラ、カエデ品種の多様な美しさを知り、様々な園芸植物をリストアップすることを始めました。それ以前にも中学生で会員となって始めたサクラソウ品種の収集栽培を通して、このようなものを確実に保全するにはどうしたらよいかという夢を妄想し、子供の頃からの憧れであった植物園の仕事に入った経緯があります。

敗戦時の昭和20年には愛知県の田舎の小学校1年生で、それから中学にかけて食糧難ではあったけれども、戦後の自由な空気の中で育ち、植物採集をしては押し葉を作り、家の庭では園芸植物を育てるなどに明け暮れました。幸いにも戦災を受けなかったのも、父親が揃えていた植物図鑑類もあり、受験勉強などというものはない時代でした。この長い幼少期に植物を繰り返し観察したことで、植物を識別する勘が培われ、野生植物も園芸植物も区別なく楽しく面白いと認識する人格ができたものと思います。

1. 栽培植物の保全がなぜ必要か

食用や資源となる植物を保全することは誰にでも理解できますが、観賞植物となるとそれは数寄者の道楽と

いう人もあり、野生植物の研究者の中には園芸植物は対象外であるとして関心を持たず、その価値を認識しない人もあるように感じます。

生き物は太陽のエネルギーを根源とし、土と水と空気から植物が作り出す栄養で動物は命を繋ぎ、人類は衣食住の全てにその恩恵を受けるばかりか、瑞々しい緑に潤いを覚え、花を美しいと感じる心の働きを体得するという高度な文化を築くことができました。この美しいと思う文化の中から、慈愛の心とか芸術というものが生まれたに違いありません。

美しい花を咲かせる園芸植物は、元々野生植物の中から選抜された個体変異(品種)で、それを親として多くの園芸品種が育成されました。長い歴史の中ではある時代の人たちの美的観賞眼のレベルがわかる資料でもあります。また、絵画や染色など古い美術品は長い年月の間に色彩が薄れ酸化して変色、風化してしましますが、古くから生き続けてきた園芸品種は、現在も当時と全く変わらぬ色の花を咲かせてくれるのです。

野生植物は個体変異の集合体である種という集団で捉えられていますが、最初にその種が定められた時に、普遍的な個体が採られたか、特殊な個体であったか疑問が残りますし、長い年月が経つと集団そのものが変異することも考えられます。一つの園芸品種は基本的には変異を起こさないもので、基準を示すものとして意義があるかもしれません。

2. 植物・品種の特定

保全の対象となる植物、ことに多数ある園芸品種については、個々の品種を特定しなくてはなりません。長い

栽培史を持つものでは、その間に間違いや混乱も多く、これを試作・調査して品種特性を記録し、栽培家からの伝承も参考にして他の品種との違いを見極め特定します。最近では遺伝子による研究が盛んですが、現在でもまざり目で見ると形態的な観察が基本で、この品種特性の調査があってこそ、遺伝子による研究もできることになるのです。

3. 品種名の文化

園芸品種には、その品種固有の園芸品種名(花名とも云う)がつけられます。日本では古くから人(女官や遊女)や愛玩動物、茶器などの器物に古典文芸から引用した雅な固有名詞をつけて愛でる習慣があり、中国の故事や和歌の歌枕などがもととなっています。遊女には源氏物語からの名前がつけられたので、これを源氏名と呼びます。江戸時代の都市で花開いた町人文化には、バックに確とした武家文化があり、さらに中世の王朝文化(公家文化)への憧れがあり、園芸の世界にも浸透・継承され、欧米と異なる特殊な文化です。

品種の特定に当ってはその原典を考察して、字体や読み方を適切に考慮し、品種本体と一体となった文化として伝えなくてはなりません。陳列の際には品種名を記した名札をつけますが、植物や植木鉢、展示場の雰囲気と調和し、見やすいように、材質や色・大きさ・書体・位置などを吟味しなくてはなりません。

4. 栽培法の文化

現在の植物栽培は、設備や施設の進歩とともに人工的なものになってきましたが、江戸時代にはまだ自然そのものでした。しかしその時代でも工夫を凝らして植物を育てる技術は培われ、個々の植物の栽培法を紹介した園芸書も刊行されています。例えば、キクでは京都や江戸だけでなく、嵯峨、伊勢、熊本、八戸、大垣などでそれぞれに育成された系統があり、観賞方式にのっとった

栽培法が確立され伝えられています。

栽培に必要な植木鉢も、古くには木箱や曲げ物、匏の貝殻などが使われ、のちに中国渡来や瀬戸焼の鉢もできましたが、たいへん高価な一品製作のものでした。江戸の街では瀬戸で焼かれた陶製の小瓶が、塩壺などの台所の雑器として安く大量に売られており、これに底穴をあけて植木鉢に流用しました。口径5寸(15cm)と6寸(18cm)があり、さらに大形の5升入りの水瓶半斗鉢に対して孫半斗鉢(略して孫半という)と呼び、ウメやツツジ、アサガオやキクあらゆる植物を植えて売られていたようです。大量生産の植木鉢ができたのは明治になって西洋から温室鉢が入ってきてからで、これを堅焼きにした駄温鉢は、ポリポットが普及する近年まで使われたことは周知のことです。その後、孫半斗鉢はサクラソウ作りに最適なものとして残り、現在も使われています。それは釉薬がかけられて乾燥し難いので、湿性地産のサクラソウの栽培に適したことと、茶褐色の地味な色彩がサクラソウの淡い花色を引き立ててくれるからです。この鉢は明治以降には焼かれなくなったので、栽培者は様々な窯元に見本を渡して同じような植木鉢を作りました。さくらそう会でも窯元に発注して共同購入を行ってきました。サクラソウに限らず植物は植え方と管理次第で、どんな植木鉢でも育てることはできますが、性質に適い見栄えもよい植木鉢はマニアにとっては大切なことです。

5. 観賞法式の文化

鉢植えの梅や盆栽の飾りつけ、桜草花壇、藤棚、花菖蒲の田圃、秋の菊花壇など植物をより美しく、情趣ある雰囲気で見賞する方式は長い栽培史の中で確立されたもので、造園の技術でもあり、日本の園芸の大きな特徴と云えます。

花壇と言えば公園で見られるほぼ平面的な植え込みが思い浮かびますが、これは西欧から教わったフラワーベッドという毛氈花壇で、本来の意味からすれば秋の菊花展で見られるような、前面が低く後方を高く配置した

境栽花壇的なものを意味します。さくらそう会には江戸時代後期の天保時代から始まった「桜草花壇」が伝承され、遅くとも明治前期の製作と考えられる一棟が存在します。組立式で間口1間奥行き5尺(180×150cm)、細い丸柱、障子の両屋根に庇つきという瀟洒な造りで、5段の棚に33~38鉢を彩りよく配置する飾り方が伝わります。この最古の原形は、2018年春の神代植物公園さくらそう展で公開展示しましたが、構造は公開済みで同寸法のもので各地で展示されています。屋敷の庭に春ごとに組み立てて飾ったもので、広い公園で展示すると随分小さく感じられます。各地のさくらそう展示会で、5段の棚に鉢を陳列するのは桜草花壇に倣ったもので、中段を目線にあわせた効果的な陳列法が踏襲されているわけです。

6. 関連する資料の保存

歴史のあるコレクションでは、過去の記録や絵図、伝承などは勿論、関係のある歴史的な記述や文芸作品なども記録にとどめておくべきかと考えます。江戸時代には木版による本草書や園芸書、絵図等が多数刊行されましたが、世界的に見てこれは驚くべきことだと思います。書籍や絵図は本屋が採算を見込んで作るもので、版木に字や絵を彫って紙に摺る技術が高度に発達し、手漉きながら紙を作る技術も発展して大量の紙が安く供給されたことが、大量な出版を可能にしました。江戸市民の好奇心は強く、寺子屋の普及によって識字率も高く、大消費都市になっていた京大阪江戸の三都には、買い求めることのできる経済力を持った市民が多数存在したのです。これも江戸文化の特記すべき事実でした。

7. ナショナルコレクションを維持するには

植物園はコレクションを保全するセンターではあるものの、組織体制の課題もあり、単独で長く続けることが難しい場合もあるかと思われます。災害などの危険も考慮すると、1園だけでの保全にはリスクがともなうことか

ら、離れた地域の複数の園や団体との協力関係を組み、市民ボランティアを糾合して行なうことも必要になるかもしれません。一方、多くの園芸植物の保全は、これまで個人の収集家やその集まりである愛好団体が行なってきました。

今後は、植物園と愛好団体の両者が講習会や展示会を協働することで、より活発な交流を進めることが大切です。これにより、重要な文化財としての栽培法や観賞様式、関連資料、絵図などを継承し、次代を担う技術者や新規愛好者の育成も期待されます。植物は消耗品ではありませんし、植物の保全活動は人が行なうものから、保全を行うことができる人材を確保養成する事が最も急がねばならない課題でもあります。そのためには特定のコレクションの保全に努めるとともに、広く植物好き花好きの人を増やすことも大切であることから、植物園では利用者を増やすことに加え、友の会を結成するなど、より踏み込んだ普及活動を展開するべきであると考えます。



荒川のサクラソウ原野(田島原)



江戸の台所雑器・孫半斗鉢 底穴をあけて使用

さくらそう会が行なってきた保全と普及活動

- 1952年に愛好者による全国組織の「さくらそう会」が発足し活動を開始。
- 余剰苗を持寄って、新しい会員に配布する普及活動が始まった。
- 日比谷公園で展示会を開催し、残された品種を紹介、美しさを見せた。
- 講習会や展示会を開催、会報を発行して情報の提供と交流を促す。
- 品種の収集・試作、特性調査を行い、品種と品種名を特定する。
- 保全すべき品種を選び、「認定品種」とすることで、品種の整理・統一を進める。
- 認定品種にもとづく正確な品種苗を配布し、展示会でも正確な名称で表示
- 認定品種を収録した、品種のカラー図譜の刊行。これで品種の統一が進行する。
- 新しい実生花の評価、選抜佳品とそこから認定品種を選定する二段階評価とする。
- 桜草鉢の製作と購入の斡旋。
- 江戸時代に創作された「桜草花壇」の復元製作、図面と寸法を公開する。
- 現在は、鉢やプランター、培養土など多様な栽培法や観賞法の研究と普及。
- 植物園との連携による展示会・講習会の開催や個人宅へ出張、切花送付による同定などを進めている。



「桜草花壇」明治初年の最古のもの



‘南京小桜’（江戸中期）最古の品種と伝わる



‘都桜’（江戸末期）大鉢



‘雲の上’（江戸末期）



‘駒止’（江戸末期）大鉢



‘松の雪’（江戸末期）



‘紅女王’（明治）

江戸の園芸と令和のガーデニング

古くて新しい植物 松葉蘭

日本松葉蘭連合会・静岡伝統園芸保存会 落合啓二

一. 松葉蘭とは、

1. 概要

今から約4億年前、最初に陸に上がった植物は、繰り返し二又分岐する軸からなり、根も葉もないマツバランのような姿をしていたことからマツバランは「古生マツバラン類」の生き残りと考えられ、「生きた化石」と呼ばれていました。しかし、マツバランには古い化石が知られていません。最近のrbcL遺伝子等のDNA塩基配列を用いた詳細な分子系統学的解析の結果では、真囊シダ類に分類されているハナヤスリ類に類縁あることが解明されています(Hasebe et al.1995)。これは、マツバランの先祖において、根や葉が失われたことを意味し、マツバランがそうした初期の陸上植物の生き残りではないことを示しています。それにもかかわらずマツバランは「根も葉もない真実」の姿で実際に生きている貴重な植物なのです。

江戸末期には農夫の松葉蘭と名古屋の庄屋屋敷(昭和47年まで実在)との交換例、また、天保2年(1831)、同7年(1836)には松葉蘭の専門書の刊行や弘化4年(1847)様々な一枚刷り錦絵の発行などがあります。

【参考図書】

- 伊藤元己(2015)新・生命科学シリーズ 植物の系統と進化 (園芸華房)
- 西田治文(2017)化石の植物学 時空を旅する自然史
一般財団法人 東京大学出版会

2. マツバランと松葉蘭

○現在ではシダ類に分類され、在来種を「マツバラン」、園芸種を「松葉蘭」と表記しています。

○シダとして分類される松葉蘭が何故、「蘭」なのか。蘭とは、フジバカマ・東洋蘭などのように、香りのよいもの・高貴なものの総称ですが、蘭と名のついたラン科で

ない植物として、葉蘭・君子蘭・熨斗蘭・藪蘭・龍舌蘭・ハゼラン・厚葉君が代蘭・鳳尾蘭等があります。松葉蘭も別名、長者蘭・箒蘭・竺蘭・松蘭と呼ばれたことから、松の葉のような貴重な植物で園芸種を「松葉蘭」と呼ぶようになったのではないかとわれています。

二. 松葉蘭界の現状と課題

1. 現状

○江戸期より戦前までで500品種名、現存品種として約50種等が存在します。しかし、間違いも多く別品種がその名に成り代わってしまっているものも多く存在していることは問題です。また、銘鑑(番付表)等による名前だけの品種も多く、挿絵・解説だけで特定するには無理があります。

○松葉蘭の場合、専門書が4冊から6冊刊行されていますが、栽培方法による芸(品種の特徴)の現れ方が極端に違う植物であるのに加え、松葉蘭に限らず、古典植物の中には、同一種であっても芸の変化により名前が変わるのを「良し」とする事が伝統的に存在します。情報の少ない時代、口伝による伝承がほとんどであり、悪意又は善意により、名前の取違いが発生しています。

2. 課題

○栽培設備の進歩により、園芸品種の胞子繁殖株(逃げ出した子たち)が台頭し、既存の登録品種との差異を視覚的に特定することが困難を極めています。レッドデータブックI・II類地域及び北限地域に於いても、歩道の植え込み・コンクリートの割れ目、海岸沿いの岩場に進出し、生態系に影響も出始めています。また、保存されて

いる栄養繁殖株に比べ、孢子繁殖株の方がきわめて繁殖力が旺盛であるため、オリジナルにとって代わっている品種もあります。

○品種の消滅を招いている主な原因として、栽培者の高齢化があげられます。管理が行き届かなくなり、手遅れの状況に陥っており、家族の方が価値を理解しようとしていない事も現実です。

○品種名混乱の要因として、品種名が無いと販売しにくいことから、適当な名前を付けて販売する者が多く、特にネットオークションの普及で混乱に拍車がかかっていることがあげられます。購入時の名前間違いが判明しても、購入時の名前前で売買する趣味家が多い事が、混乱の一因です。

三. 日本松葉蘭連合会の取り組み及び方針

1. これまでの活動実績

普及活動として、大阪花の博覧会(政府苑展示)、浜名湖花博では日本松葉蘭連合会が主導し静岡県伝統園芸保存会を設立、静岡県の事業を全面的にバックアップ、当該年度はもとより10・15周年記念事業の支援を行い、現在20周年記念展示の準備中です。徳川家康公顕彰400年祭では、駿府城巽櫓^{たつみやぐら}を全面的に使い、江戸時代の植木大尽「帯笑園」の貴重な資料展示をはじめ古典園芸植物で埋め尽くしました。学会関連では、「生き物文化史学会」に於いて、松葉蘭の魅力を紹介しました。園芸雑誌・メディア等による紹介では、展示会情報などに毎月掲載してきましたが、なかなか認知されないのが現状で、平成29年6月より東名高速上り線富士川SA併設道の駅富士川楽座に於いて、毎月開催を原則に「松葉蘭を中心とした古典(伝統)園芸植物展示・即売会」を開催しています。即売会では、松葉蘭・万年青・富貴蘭・長生蘭・細辛・観音竹・雪割草はじめ、斑入り珍品植物等常時500鉢以上を用意し品物の紹介・栽培に関するQ&Aに対応しています。

2. 新たな取り組み

その他の普及活動として、日本松葉蘭連合会主催の展示会・勉強会を年2回以上開催し、会員相互の意思疎通はじめ新たな栽培技術の情報交換等を行っています。また、各地で開催されている交換会に積極的に松葉蘭を出品し、その魅力の紹介を行っているところです。新たな栽培技術として、現在の住宅事情に即した栽培株「マイクロ松葉蘭」の栽培方法を公開して、普及に努めています。

3. 保存活動方針

①現物保存を原則とし、昔の収集家及びその周辺の栽培家を訪ね収集に努めています。また、持ち込まれた松葉蘭について出来る限り譲渡を受け、名称の照合を行った後、標準株の特定を行い順次証明書の発行を検討します。新規登録品種は、特定された株についておおむね10年間を目途に、品種証明書の発行を行います。目的は、孢子繁殖株及び類似種との混乱を避けるため、特定品種の差別化による保護活動を行います。

②標本保存(検体)としては、品種特定にあたり、配偶体・孢子体の付いた株、2検体以上の提出を義務付け、DNA解析を行うための標本作りに主眼を置き将来に備えます。

※現時点でのDNA解析は、個々の分類までは想定していません。

③記録保存として、既存資料(専門書・銘鑑・挿絵・解説)のデータベース化を図り、現存品種との比較検討を行い、各産地のDNA解析を行い、産地毎の特色を把握します。また、標本の公的機関への分散化を検討します。また、写真・デジタル等の記録媒体では、スケールを入れたステレオ撮影を行い、立体モデルの記録保存を行います。

四. まとめ

園芸における栽培技術は目覚ましいものがあり、松葉蘭の栽培技術が特別だというわけではなく、採算が取れないから研究が進められないだけであって、メジャーになれば、孢子培地が出来、人工交配も行われるのは時間の問題であり、すでに行われている可能性が高いことと思います。躊躇している間にも、国内外から新たに生み出されたものが大量に流入することが想定されます。その様な事態になれば、日本人特有の感性により磨き上げ育まれた、文化も伝統も押し流されてしまいます。結果、化け物づくりに一喜一憂する時代に成り下がってしまいます。今からでも遅くはありません。伝統の上に新しい文化を受け入れる体制づくりが急務と思います。

そのためには、栽培法・品種の特定等においても、熟練者に頼るのではなく、平準化したルール作りが急務と考えます。

代表的な品種

青龍角 (SEIRYUUKAKU)

嘉永2年(1849)登場、太軸。草丈4~8cm。紺性のごく強い無地物の最高級品である。軸の太さはタバコぐらいになり、分枝点は低く、枝はやや屈折して竜が地を這う姿を思わせる。根も太くて数は少ないが長い。実は大きく金色にはせて軸・枝の濃緑色とのコントラストが美しい。丈夫で古木も長持ちするため、古木の色づきを斑と勘違いする場合がある。繁殖は余り多くない。太軸ものは一般に光には弱い。(写真1)

富嶽ノ虹 (FUGAKU NO NIJI)

昭和17年(1942)登場、中軸。草丈15~20cm。昭和の松葉蘭中最高級品で、気品のある姿と多彩な斑の変化をもつ名品である。出芽は緑色で分枝する少し前頃から斑を見せ始め、斑の色が多様に変化する。象牙色・銀・黄・虹・紅・紫・白など5色にも7色にも変化することから虹と名づけられた。富士山が雪化粧する頃(9月中旬)より、

白くなり始め四季それぞれの富士の移り変わりにつれて変化するという趣を愛で富嶽の名がつけられたといわれる。(写真2)

雲龍獅子 (UNRYUJISHI)

天保8年(1837)登場、細軸。鳳凰縮緬より縮緬が細かく、枝先が舞い乱れた姿をみせる芸が多い。丈夫でよく殖える。(写真3)

楊枝文龍山 (YOUJIBUNRYUZAN)

天保2年(1831)登場、中軸。草丈は15~20cm。明るい緑色。軸は棒状にのびて滑め肌。ヒゲが無くすっきりしている。腰が高く、短く数多い枝の先端に実が群がって着生する。陽を特に強く採る。陽が弱いと甚だしく徒長する。丈夫で繁殖も抜群によい。(写真4)

鳳凰柳 (HOUOUYANAGI)

昭和15年(1940)登場、中軸。草丈10~15cm。柳のように枝先が垂れるのでこの名がある。分枝点から少し伸びたところで頂上となり、枝先が下垂する。直射日光を採ると枝先が突っ立って趣のない木となる。陽が弱いと柳の芸をよくみせる。紺性が強く丈夫で殖えも多いほうである。(写真5)

金鶴 (KINTURU)

昭和25年(1950)登場、折鶴金斑の柄のよくはぜたもので、斑は金色というにふさわしい。出芽はやはり黄色で折鶴と同じ性質、特徴がある。本芸を顕したものは軸の下部から枝先まで金色に輝くばかりのものが揃うというが、そうした本芸品は長い時間と根気が必要で現在では殆んど見られない。(写真6)

古金蘭 (KOKINRAN)

明治16年(1883)登場、中軸。草丈15~20cm。分枝点が低く枝分れは少ない。出芽はごく薄い緑であるが、木勢がよいものは黄色に出るものもある。成木してから斑が顕れる。薄い黄色の斑は後芽えりとなる。木は揺らい

だように立ち、全体的に柔らか味のある姿が特徴。姿が整いにくいうえ、葉先の焼けることが多く作のむずかし品種。実のつきにくい品種で、胞子を見ることは稀である。陽は中程度に摂ることが無難な品種。現在、陽を強く採っても焼けない系統のものが選別され、2系統が存在する。(写真7)



写真4. 楊枝文龍山 鉢/尾張藩御庭焼(竹に福来雀)



写真1. 青龍角



写真5. 鳳凰柳



写真2. 富嶽ノ虹



写真6. 金鶴



写真3. 雲龍獅子



写真7. 古金蘭 鉢/阿波蜂須賀家蔵オランダ

神代植物公園のウメコレクションとうめ園

東京都立神代植物公園 園芸係長 石川等

梅は、百花の魁、花の兄。寒中から咲き始める新春の植物として、また歳寒三友の一つとして、実は伝統的な食材である梅干しの材料として、我々になじみ深い伝統的な日本の園芸植物です。

ウメは、中国南部、揚子江(長江)流域の原産といわれ、中国では、古くから薬用、食用として栽培されていました。その栽培は殷代(BC17世紀~BC1046年)には始まっていたと思われ、殷代の遺跡から出土した銅鼎の中からウメの種子が発見されています。前漢(BC206~8年)のころより観賞されるようになり、その後、唐代(618~907年)に発展を重ね、宋代(960~1279年)には隆盛を誇りました。

ウメは、我が国には弥生時代前期に伝わったとされ、西日本各地の遺跡から種子や材が出土しています。これは、薬用や食用として持ち込まれたものと思われます。奈良時代になり、遣唐使の往来により梅花を観賞する習慣が伝えられウメは宮廷文化と深く結びつきました。貴族達は、こぞって、「わが宿、わが苑」の主木とし、「梅花の宴」を開き、和歌を吟じました。奈良時代に成立した「万葉集」には、梅花を詠った歌が118首もあり、その愛好熱が伺われます。

平安時代になり、遣唐使が廃止され中国(唐)の文化の影響が弱まり国風文化が栄えます。サクラの愛好熱が高まり、人々はウメよりもサクラをもてはやすようになります。その影響からか、サクラの人気に奪われるようにウメの人気には陰りが見えはじめ、梅花の宴も廃れ、ウメを詠う歌の数も減っていきます。しかし、ウメの実の実用的な価値は忘れられず、また、紅梅の渡来や、天神信仰などと結びつきウメは愛好され続けました。

江戸時代になると、戦乱のない「天下泰平」な世が続く、徳川家康、秀忠、家光の三代の将軍達が園芸好きだったこともあって園芸が振興し、ツバキやツツジ、カエ

デ、サクラ、サクラソウ、キク、アサガオなど様々な日本オリジナルといえる園芸植物が作られ流行します。園芸文化は、武士や貴族などの特権階級から庶民にも広まり、下々である庶民までも園芸を楽しむようになったのです。



江戸期より伝わる梅の品種'月影'

ウメの栽培・観賞も、江戸期に大いに発展し、様々なウメの品種が現れます。江戸時代初期水野勝元が著した日本初の園芸書『花壇綱目(1681年)』には、「梅珍花異名みずのかつもとの事」として52品種、江戸染井の植木屋 伊藤伊兵衛かだんこうもくが著した『花壇地錦抄(1695年)』には、「梅のるひいとういへい(類)」として47品種、江戸期中期の本草家松岡恕庵の著した『怡顔斎梅品(1760年)』には、白梅類29品種、紅梅類・雑色類31品種、江戸後期に幕臣、春田久啓の『韻勝園梅譜(1812年)』には98品種のウメの品種、松平定信まつおかじょあんの庭園浴恩園及び定信の抱屋敷「六園」のウメの品種いがんさいばいひんを記載した『海津の波(梅花図譜図巻)』には162品種のウメがあげられています。

また、庶民の間にも風流や行楽の楽しみが広まり、江戸、江戸近郊の神社や仏閣、花の名所巡りが行われるようになりましたが、その中には、梅の名所もありました。梅屋敷(亀戸)、新梅屋敷(現在の向島百花園)、蒲田の

梅屋敷、湯島天神、亀戸天神、杉田梅林などが有名です。

さて、神代植物公園は、「東京開都(江戸築城)500年記念植物園」として計画され、昭和36年10月20日に開園しました。園の特徴として、「日本に伝わるウメ、ツバキ、サクラ、その他の花木の園芸品種を多く集め、これを保存栽培している」ことがあげられます。古くから伝わる品種を中心に、ツバキ類250種・品種620本、サザンカ類30種・品種110本、サクラ類48種・品種110本、カエデ類60種・品種110本、ハナモモ11品種30本などが展示・栽培され、江戸由来の園芸植物を現在に伝えています。特にウメは、72品種、214本の園芸品種を保存・栽培しており、「月影」、「森の関」、「月宮殿」、「江南所無」、「玉牡丹」などの江戸期より伝わる貴重な園芸品種も見られます。



江戸期より伝わる梅の品種「道知辺」

神代植物公園には、もう一つ、江戸園芸文化を伝える物があります。幕臣の春田久啓著の『韻勝園梅譜』の模写帖です。

春田久啓は、江戸末期の著名なウメの蒐集・育種家で、禄高450石の旗本、西丸新番組(将軍の警備を担当する職)組頭を務めていました。表六番町(現在の東京都千代田区六番町)の自邸の庭を韻勝園と名づけ、ここに数百株の梅を蒐集し、また自ら育種栽培を行い、請う人があれば縦覧を許していました。この自邸の庭(韻勝園)のウメの品種を描写し、花の特徴などの解説を入れたものが『韻勝園梅譜』です。原本は失われたと考えられ、現在では見るできません。

神代植物公園所蔵の『韻勝園梅譜』の模写帖は、桐箱に収められ、折本仕立て、厚紙の台紙に絹布を張り、岩絵具で精緻に梅の品種の図を描き、漢字と変体がなで品種ごとの解説文を記したもの。本を収めた桐箱には「摹韻勝園寫真梅譜」と箱書きされ、桐箱の裏書きから「不染亭主人」を名乗る人物により天保7年(1811年)3月に成立したと考えられます。

題簽は、江戸期の著名な漢詩人大窪詩仏(天民)の書、題字の揮毫は、「棕軒」こと福山藩第五代藩主阿部正精(1775~1826、文化元年~文化14年(1804~1817年)幕府奏者番就任、文化元年~文化5年(1804~1809年)寺社奉行を兼任、文化7年(1810年)寺社奉行再任、文政6年(1823年)老中昇格)、序文を紀正毅こと宮川藩第五代藩主堀田正毅(1762~1819、寛政九年(1797年)幕府奏者番就任、同年寺社奉行を兼任、文化3年(1806年)寺社奉行を辞職)、江戸後期の朱子学者林述斎(1768~1841)が抜文を記すなど当時の幕閣の要人や著名人が多く関わっており、文化8年(1811年)に成立したオリジナルの『韻勝園梅譜』を正確に模写したのと考えられます。

その掲載品種数は、100種(ただし、「明石」と「紅筆」という品種が重複して記載されているため、実数は98品種)。本の保存状態も良く、今でも色鮮やかな梅の図を楽しむことができる貴重なものとなっています。



韻勝園梅譜寫真梅譜:神代植物公園蔵

展示会を通じた江戸園芸文化の継承

東京都立神代植物公園

神代植物公園は、昭和36年に開園して以来、江戸時代に発展した日本古来の園芸植物（江戸園芸植物）とその園芸文化の保存継承に寄与する植物園として、江戸園芸植物の展示に特に力を入れてきました。

今回のシンポジウムで取り上げたサクラソウを始め、キク、ハナショウブ等の草本類やツバキ、サザンカ、ツツジ等、江戸時代から我が国に伝わる多様な園芸植物を収集・栽培し、来園者に公開しています。また、「神代植物公園菊花連盟」「東京皐月会」「日本巻柏連合会」「さくらそう会」等、多くの展示協賛団体、愛好団体の協力を得て、江戸園芸植物を中心に、様々な展示会を、当園の主催で開催しています。展示会は、屋内の植物会館展示室とロビー、屋外の特設展示場等で、例年50回以上を開催しており、ほぼ1年を通じ何らかの展示を観ることができます。

展示会に使用する植物は多くが鉢植えです。鉢植えを用いた展示は、花の見頃を迎えた植物を、期間中、常に良好な状態で観賞してもらえるだけでなく、植物ごとに特有の仕立て方や飾り方をすることで、それぞれの園芸文化を来園者に伝えることができます。

サクラソウは、今回のシンポジウムでも紹介しており毎年4月の展示会を通じて、単にサクラソウという植物だけでなく、栽培に用いられてきた植木鉢や品種の命名に関する由来、江戸時代からの観賞技法である「桜草花壇」等を来園者に伝え、江戸園芸文化の普及啓発に努めています。

秋の恒例行事となった菊花大会では、大菊の数々や懸崖菊をはじめ、当園菊花大会の特色である小菊盆栽や個人花壇、古典菊の展示・解説等を通じて、我が国が誇るべき園芸文化の魅力を発信しています。

各展示会は、季節ごとに特色ある花や植物を出品しており、毎年、目当ての花を楽しみに観賞に訪れる来園者

も多く、当園の魅力向上に大きく貢献しています。また、展示する協賛団体や愛好会の会員にとっても、手塩にかけて栽培・作成した作品を不特定多数の来園者に公開するとともに、展示を通じて会員同士の交流を図ることでモチベーションを高め、栽培技術の向上や活動自体の継続につなげています。

江戸園芸をはじめとする日本の園芸植物や園芸文化の保存継承には、単独の植物園の取組では限界があり、これら多くの展示協賛団体や愛好家との「協働」が不可欠です。一方、協賛団体の中には、会員の高齢化や栽培環境が確保できなくなるなどの課題をかかえるところもあり、その担い手や愛好者のすそ野を広げていくことも重要です。

今後も、展示会の開催を通じて、協賛団体等と共に、日本の園芸文化を次世代へ継承していきたいと思えます。



さつき展(5月)



菊花大会(11月)